

富山の小河川流域の生き物

富山県生物学会・富山県小河川流域調査グループ



富山の小河川流域の生き物

富山県生物学会・富山県小河川流域調査グループ

富山県は東部に3,000m級の北アルプスがそびえ、南部には飛騨の山地、西部には低山と規模の異なる山塊があります。その山塊に降った雪や雨は、大小様々な河川を形成し、森を育み、稲田を潤し、飲み水を供給し、私たちの暮らしを支えています。山地から平野部に広がる流域は、水中や陸上の生き物たちが暮らす場でもあります。しかし、平野部の大河川を除くと、その実態はあまり分かっていません。

富山県生物学会では、私たちの身近にある小河川流域の生物相（森林群落、土壌動物、水生昆虫、底生動物、魚類、両生類・は虫類、ほ乳類）を明らかにするため、右図に示した8河川と1つの池で調査を行い、会誌「富山の生物」に報告してきました。

調査は現在も継続中ですが、身近な自然の特徴を知ってもらうためにはよい機会であると考え、富山の小河川流域の生き物の概要を紹介する小冊子を発行することにしました。小中学校や高等学校、地域の皆様をはじめ、多くの方々にご利用いただければ幸いです。

調査には地元の方や関係機関にお世話になりました。心よりお礼申し上げます。



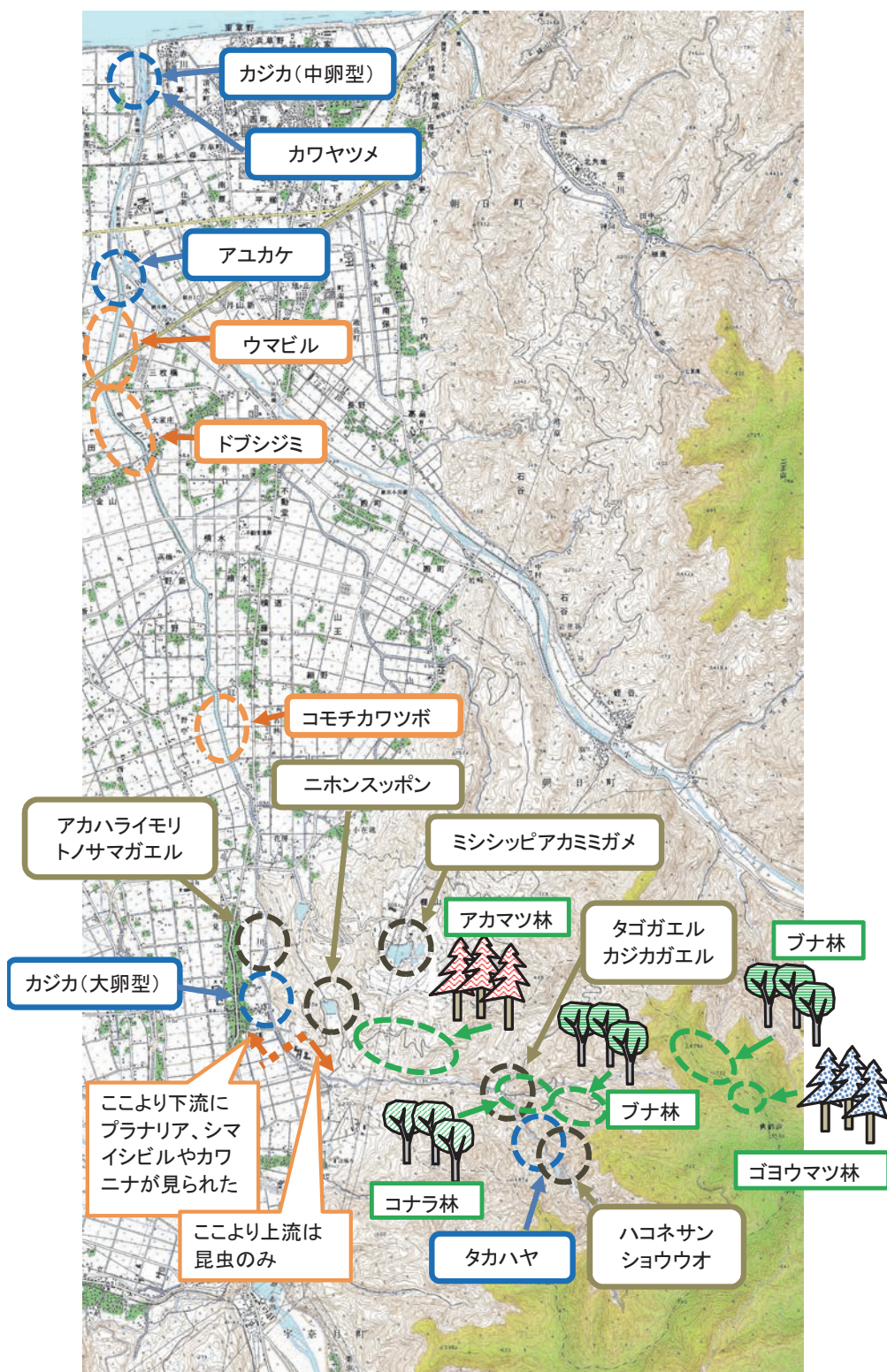
調査した富山県内の8小河川と1つの池

目次

舟川流域の生き物	2 - 5
角川流域の生き物	6 - 9
栃津川流域の生き物	10 - 13
黒川流域の生き物	14 - 17
山田川流域の生き物	18 - 21
洪江川流域の生き物	22 - 25
仏生寺川流域の生き物	26 - 29
余川川流域の生き物	30 - 33
猫池とその周辺の生き物	34 - 35
森林群落の特徴	36 - 37
水生昆虫の特徴	38 - 39
底生動物の特徴	40 - 41
魚類の特徴	42 - 43
両生類・は虫類の特徴	44 - 45
ツキノワグマの採食痕跡とほ乳類の特徴	46 - 47

本書に掲載した地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の電子地形図(タイル)を使用した。
(承認番号 平27情使、第419号)

舟川流域の生き物



舟川は二級河川である小川の支流で、入善町と朝日町を約12km流れる。負釣山（おいつるしやま、標高959m）を最高峰とする東から南西方向に伸びる分水嶺を源に、入善町舟見のふれあい温泉あたりまで山間部を流れ下り、黒部川扇状地の右岸側の河岸段丘内を北流し、朝日町舟川新で小川に合流する。上流では右岸から中谷川、オコ谷川が合流し、平野部では黒部川の一部の水が左岸側から入っている。2012年（平成24年）に洪水調節・流量調節・消雪用水確保を目的とした県営舟川ダムが完成した。調査した2011年はダムの工事中であった。右岸側の丘陵地には農業用の大きなため池がある。



小川との合流点（右が舟川）



舟見城趾より（舟見の集落と舟川）



舟川ダム（平成24年完成）



負釣山

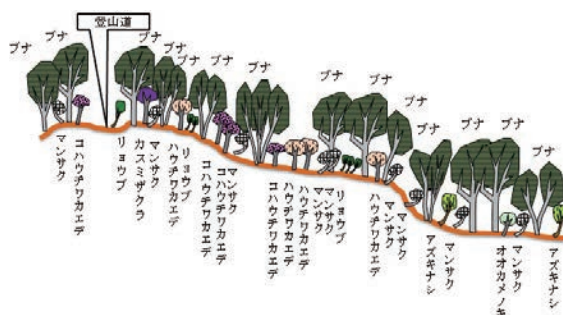
〔調査年と分野〕

調査は2011年に実施し、調査分野は、植物（植生と森林群落）、水生小動物（底生動物、水生昆虫）、土壌動物、魚類、両生類・は虫類、ツキノワグマの採食痕跡である。

森林群落

舟見より上流の舟川流域面積は約30km²で、その内87%が森林植生、残りが水田等（13%）であった。森林植生で最も多くを占めたのはブナ・ミズナラ林（流域面積の53%）であった。丘陵部を中心にコナラ・アカマツ林（17%）とスギ植林（17%）が分布していた。分水嶺となる負釣山の稜線にはブナ林とゴヨウマツ林が分布していた。丘陵地のアカマツ林の密度は10,000本/haを越え、今回の調査でも密度が最も大きい林の1つであった。

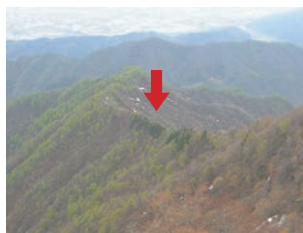
特徴的な植物は、負釣山に多く見られたブナである。ここのブナは根元から多くの萌芽が伸び、しかもその枝に花がつき、殻斗が形成されていた。また、ブナ林にはヒトツバカエデが多く見られた。



負釣山ブナ林の断面模式図



萌芽したブナと殻斗



負釣山稜線のゴヨウマツ林



ヒトツバカエデの花

水生昆虫

舟川では6目30種の水生昆虫が得られており、最も種数が多いのはカゲロウ類で16種、次いでトビケラ類が6種であった。トンボ類、カワゲラ類などは種数・個体数とも少なかった。カゲロウ類では、ヒラタカゲロウ類とマダラカゲロウ類が、トビケラ類では、ヒゲナガカワトビケラ、ウルマーシマトビケラ、コガタシマトビケラが多く得られた。

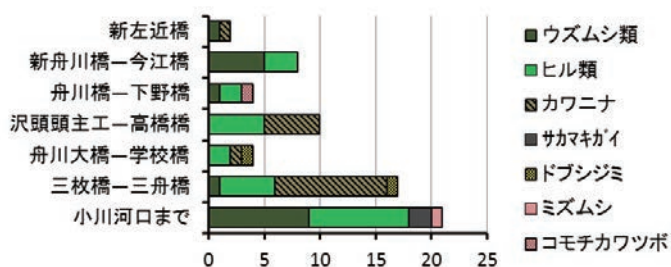


ヒラタカゲロウ類

底生動物

確認した種類は11種であった。シマイシビル、サカマキガイ、カワニナをはじめ、水質がきれいなことを示すウズムシ類が多かった。一方、少数ではあるが近年県内では激減したドブシジミも見つかった。ウマビルなども複数個所で見つかったことと合わせ、農業用排水とのかかわりが強いかもしれない。

舟川で確認した底生動物の個体数(上流から河口へ)



ドブシジミ



ウマビル

魚類

舟川上流から本流の小川下流域まで、7科17種が確認された。上流域にニッコウイワナが出現し、下流域ではコイ科魚類が少なく、ハゼ科・カジカ科が多い、急流河川の特徴を示した。カワヤツメ、シロザケ、カジカ(中卵型)や、日本の分布東限とされるタカハヤが確認された。

舟川の出現魚類

No.	科名	和名	1		2		3		4		5		
			組戸橋		鹿坂橋		今江橋		新小川橋		赤川橋		
			6/19	9/10	6/19	9/10	6/19	9/10	6/19	9/10	6/19	9/10	12/2
1	ヤツメウナギ科	スナヤツメ					1		3				2
2		カワヤツメ											
3	アユ科	アユ							3	3			35
4	サケ科	シロザケ											○
5		イワナ	1	1									
6		ヤマメ					1	1					1
7	コイ科	ギンブナ				1							3
8		ウグイ											
9		タカハヤ			5	22		2	2				41
10	ドジョウ科	シマドジョウ				6							
11	ハゼ科	トウヨシノボリ											6
12		ウキゴリ											1
13		スミウキゴリ											15
14		ヌマチチブ											1
15	カジカ科	アユカケ							1	5			4
16		カジカ(大卵型)	8	15	10	12							13
17		カジカ(中卵型)											1
		個体数計	9	16	15	41	2	3	9	25			104
		科数計	2	2	2	3	2	2	4	3			5
		種数計	2	2	2	4	2	2	4	3			6



カワヤツメ



タカハヤ

両生類・は虫類

両生類は13種確認された。平野部は区画整備が進み、水田の代表的なトノサマガエルはほとんど見られなかった。上流にはヒダサンショウウオ、タゴガエル、カジカガエルなどの溪流にすむ両生類が見られ、標高は低いものの急峻な県東部の地形を反映しているようだ。

は虫類は6種で、県内ではあまり記録のないニホンスッポンや県東部ではほとんど記録のない外来種のミシシippアカミミガメがため池で見られた。



タゴガエル

舟川流域で確認された両生類・は虫類

	平野部 (～舟見)	舟見 (～オコ谷)	オコ谷～	林道	周辺の池
ヒダサンショウウオ			○		
ハコネサンショウウオ			○		
アカハライモリ	○				○
アズマヒキガエル				○	
ニホンアマガエル	○				○
タゴガエル			○		
ニホンアカガエル	○				
ヤマアカガエル			○		○
ツチガエル	○		○		○
トノサマガエル					○
シュレーゲルアオガエル	○				
モリアオガエル	○				○
カジカガエル		○	○		○
両生類の種数	6	1	6	1	7
	13				
クサガメ					○
ミシシippアカミミガメ					○
ニホンスッポン					○
ニホンカナヘビ			○	○	
シマヘビ	○				
ヤマカガシ				○	
爬虫類の種数	1	0	1	2	3
	6				

ツキノワグマの採食痕跡

2011年11月に舟川流域の林道約10kmで調査した結果、クマの採食痕跡は確認されなかった。舟川流域の「平野部エリア」では合計66本のカキのうち、2009年以前にクマが利用した際の爪痕は1本のみ(2%)確認され、2010年秋の爪痕は確認されなかった。「山沿いエリア」では合計58本のカキのうち、2009年以前の爪痕が32本(60%)、2010年の爪痕が8本(15%)にあったが、2011年秋の爪痕は確認されなかった。山沿いではクマによるカキの利用があるものの、年による変動があり、また、大量出没年には平野部にも出没があることが分かった。



2010年秋の爪痕

まとめ

舟川は急勾配の川で、堰堤が多いため、回遊魚の遡上の妨げになっている。以前、カワヤツメは多くの河川にいたが、今は少なく珍しい。タカハヤの生息地は全国的に見ても分布の東限に近い。水田は圃場整備が行われたため、畦に草がほとんどなく、水田の代表的なトノサマガエルがほとんど見られなかった。山麓には大きなため池があり、ニホンスッポンが見られた。丘陵地では森林施業が行われているが、必要以上の開発はされていないので、ウラジロガシ等の常緑広葉樹が混じるブナ林が残っている。また、今でも山の神を祭った行事が継続して行われており、山と人との関係が密接な地域でもある。急流河川と周辺の整備された水田、その一方、山を大事にし、適度に利用してきた流域と言える。